① 毎月25日発行

# 山と博物館

第５６巻　第１０号　２０１１年１０月２５日　　市立大町山岳博物館

北アルプス高山帯のお花畑で夏を過ごすツキノワグマ　撮影： Yan Muzika

## 高山帯で発生した人身事故から見えること

林　秀剛

２００９年９月19日、大型連休初日の観光客で賑わう、乗鞍岳畳平バスターミナルで、ツキノワグマによる人身事故が発生した。重軽傷者９名。この重大な事故を通して、野生動物への対応に関して、さまざまな問題が見えてくる。

このニュースを最初に聞いたとき、生ゴミなどで餌付けされたクマ？と思った。現場が岐阜県とのことで、長野県の担当を通じ、岐阜県に原因の徹底解明をお願いした。駆除されたクマの素性を検証するための試料の入手もお願いしたが、死体はすでに埋められてしまったとのこと。急遽、岐阜大学の野生動物管理学研究センターの方が掘り出すことになり、安定同位体分析用の体毛を採取してもらった。

数日後に現場検証。周辺にはハイマツやコケモモなどが実っており、自然の生息環境は良好とみられた。関係者からの聞き込みから、ごく普通にクマが生息していることも分かった。また、安定同位体分析を行った結果、生ゴミに餌付いた傾向は見られず、ごく自然の個体であることが判明した。

その後、観光客が撮影した写真から、事故現場から４００ｍほど離れた場所が第一現場であり、興奮したクマが山から駆け下りてきたとの証言も得られた。山中に潜んでいたクマが、何者かに追い立てられて、道路に飛び出したことが発端であろう。

信州では、餌が不足する厳しい夏を越すために、山を下って畑や果樹園でさまざまな被害を生じさせているクマがいる一方、新鮮な植物の芽生えを追って山を登り、高山帯のお花畑を利用しているクマもおり、山岳地域の高さを巧みに利用している。後者のクマが、乗鞍の事故に関わったものと推定する。写真は、お花畑で昼日中、リラックスして餌を食べているクマで、信州ツキノワグマ研究会が行っている北アルプスでのクマ観察ツアーの参加者ＹａｎＭｕｚｉｋａさんが撮影したものです。

この事故から得られる教訓。信州の豊かな自然の中にはクマも生息していることを周知徹底する（情報の開示）、野生動物との付き合い方についての教育を徹底し、とくに餌付けになるような行為は絶対にしない（普及啓発）、クマに会ったら慌てない、挑発しない（緊急時の行動）などなど。自然との付き合い方も、新しい時代に入ったことを認識して欲しいものです。

（ＮＰＯ法人　信州ツキノワグマ研究会　理事）

研究ノート

# 大町市「山寺廃寺」と周辺史跡の考察（その一）

荒井今朝一

## はじめに

大町市では本年度、山寺遺跡の発掘調査を進めている。一般に「山寺（やまでら）」といえば、山形市にある立石寺が有名であるが、各地に同様の地名が分布しており、長野県内では、大町市社閏田の山寺のほか茅野市豊平の「山寺」などが知られている。いずれも集落から少し離れた里山の奥深い場所に、かつて古い由緒を備えた寺院が存在し、その後に退転又は移転している場合に多い。大町市の場合も同様で、現在は大町市社の曽根原集落に立地する源花山盛蓮寺は、古くは清瀧山と称し、現在地から北東に2kmほど離れた「山寺」（図1参照、以下本文中特に断らない限り「山寺」とは大町市社の「山寺廃寺跡」をいう。）の山中にあり、中世のある時期、現在地に移転したとする伝承が残されてきた。

山寺については、こうした盛蓮寺との関係のほか、出土品やその後の調査等によって中世、大町を中心に安曇地方を支配してきた仁科氏所縁の寺院が存在したのではないかとの仮説が提起され、ほぼ定説化してきた感があるが、その一方で、周辺の寺院遺構や仁科氏関係の史跡との関連、大町市から北安曇郡池田町に広がる大峰山（写真1）との関係など、これまであまり検討されてこなかった面からの考察もわずかではあるが明らかになってきたように思われる。

図1　山寺廃寺位置図（周辺古寺院、主要史跡の分布）

ここでは、限られた紙面の中で、その概要について述べてみたい。

## 一　盛蓮寺について

盛蓮寺[3]（図1の④）は、中信地方では最古の木造建築物である重要文化財指定の観音堂（写真2・本尊は鎌倉時代の如意輪観音坐像）をもって知られており、江戸時代までは高野山遍照光院末の真言宗寺院であった。

この寺が山寺から移転したとする伝承は、民間に流布してきたばかりでなく、寛延四年（一七五一）に荒河出芳[4]が記した「盛蓮寺観

音堂縁起」（末尾別掲、以下「縁起」という。）にも詳しく記述されており、そこに記載されている内容自体は、にわかには信じ難い部分も多いが、出土品や周辺に点在する五輪塔などの遺物、遺構から盛蓮寺の原型となった寺が平安時代後期以降、山寺廃寺跡に存在したことについては、極めて信憑性が高いとみられている。

写真１　大峰山遠景（大町市常盤清水より）

とりわけ観音堂[5]については、鎌倉時代の様式を模した阿弥陀堂様式でありながら建築年代は室町時代中期頃とみられ、「縁起」には「盛蓮寺は鎌倉時代に山寺から現地に移転した」との記述があるが、実際、盛蓮寺が山寺から移転したものであったとしてもその時期は、室町時代中期頃ということになる。

## 二　山寺廃寺跡発掘調査の概況

山寺廃寺跡が一躍脚光を浴びたのは、昭和三二年に現地で道路整備を進めていた際、偶然に古瀬戸瓶子二点、同四耳壺、青白磁水注、土師質土器、写経石など多くの遺物が発見されたことによる。（写真３）いずれも鎌倉時代前期の製作とみられ、これら出土品のうち瓶子などの器物内には成人男性複数分の火葬骨が納められており、埋葬の際、故意に器の一部を損壊させた痕跡が認められている。詳細については『大町市史』[6]第三巻等に詳しいのでここでは省略するが、出土品は大町市の文化財指定を経て長野県宝に指定され、現在は大町市民俗資料館（社公民館併設）に展示されている。

写真２　盛蓮寺観音堂

その後、周辺で新たに写経石一点が見つかったほか、昭和四九年に一部地点の測量が行われた程度で、ほとんど具体的な調査等は行われてこなかったが、大町市文化財センターでは、平成一四年から一五年にかけて複数のポイントで発掘調査を行い、伝別当寺跡、鐘楼跡、堂跡などで礎石や石積跡が確認され、集石墓や火葬跡のほか多数の古瀬戸や青磁、白磁、珠洲焼などの土器片が検出された。さらに本年度は、周辺の緩斜面を中心に発掘調査を行った結果、これまでに多くの集石墓が確認され、土器片のほか[7]石製板状卒塔婆一点が発掘されている。

今後、詳細な調査報告が待たれるが、図２は、これまでに確認された「山寺廃寺跡出土遺物の年代別分類」である。これによれば、山寺に寺院が存在したのは、一二世紀後半から一五世紀頃までとみられ、終期は現存する盛蓮寺観音堂の建築年代である一五世紀半ばとほぼ符合しており、盛蓮寺がこの地から現在地に移転したとする伝承と矛盾しない。

写真３　山寺廃寺出土品（県宝）
（左から四耳壺、土師質土器、古瀬戸瓶子が二点）

一方で伝観音堂跡付近では、現盛蓮寺観音堂と同規模の三間×三間の掘立柱遺構が確認されているが、現存する観音堂の構造等を詳細に検討した結果では、現観音堂そのものが山寺から移築されたとの見解には否定的な結論が出されている。[8]

## 三　山寺廃寺と周辺古寺院等の分布

| 種類 | 11世紀 | | 12世紀 | | 13世紀 | | 14世紀 | | 15世紀 | | 16世紀 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 前半 | 後半 | 前半 | 後半 | 前半 | 後半 | 前半 | 後半 | 前半 | 後半 | 前半 |
| 青磁 | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| 青白磁 | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | |
| 白磁 | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| 美濃（灰釉陶器・山茶椀を含む） | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | | |
| 古瀬戸 | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | |
| 常滑 | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | |
| 珠洲 | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | |
| かわらけ | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | |
| 内耳鍋 | | | | | | | | | | ■ | ■ |

図２　山寺廃寺跡出土遺物年代別分類（島田哲男氏作成）

| 寺院の名称 | 寺院の由緒・由来等 |
|---|---|
| ① 常光寺（じょうこうじ）<br>（社常光寺） | ・京都の浄光寺を勧請と伝わる。現在は寺跡のみ。<br>・近隣に山門跡、五輪平が、新引沢（滝の沢）には磨崖仏をもつ清音之滝があり、江戸時代までは境内に観音堂が所在。 |
| ② 常福寺（じょうふくじ）<br>（社木舟） | ・鳥屋沢沿いにあり、仁科氏祈願寺の伝承をもつ。<br>・仁科氏の居館移転と共に大町市街の現弾誓寺（天台宗）へ移転、平安時代中期の聖観音立像を所蔵。<br>・現地にも薬師如来を本尊とする浄福寺（浄土宗）が存続。上方に大規模な山城（北城，南城）あり。<br>・寺域から安貞２年(1228)「女大施主源氏、平康盛」の銘がある鉄製鰐口が出土。 |
| ③ 龍泉寺（りゅうせんじ）<br>（社丹生子） | ・盛蓮寺の隠居寺、山号尾中山と伝える。<br>・思沢の奥、附近に丹生子関所、丹生子城跡あり。<br>・山寺からの古道沿いに「はかんどう」地名が残る。 |
| ④ 盛蓮寺（じょうれんじ）<br>（社曽根原） | ・江戸時代まで高野山遍照光院末。仁科氏の祈願寺と伝える。山号は源花山。<br>・鎌倉時代の如意輪観音を本尊とする室町期の観音堂が現存。<br>・山寺からの移転の伝承をもつ。（詳細は本文参照） |
| ⑤ 堂　平 | ・ここから山寺に最初の寺院が移転されたとする伝承がある。<br>・下方に中世集落跡の上在家、中在家あり。<br>・大峰山の山頂に近く、沢筋の分水嶺上方に当る。<br>・平坦面２段あり、大峰全体を神体とした古堂跡か？ |
| ⑥ 神宮寺<br>（社宮本） | ・高野山西禅院末、真言宗。仁科神明宮の別当寺。<br>・中世には六坊を備えた大寺とみられる。 |
| ⑦ 覚音寺（かくおんじ）<br>（八坂藤尾） | ・近世は曹洞宗、中世までは真言宗又は天台宗か？<br>・平安末の千手観音立像、鎌倉初期の持国天像、多聞天像を所蔵。<br>・千手観音立像は治承３年に仁科盛家によって開眼供養。<br>・戸隠との関係が窺われる。（詳細は本文参照） |
| ⑧ 薬師寺<br>（社松崎） | ・「丑館」といわれた仁科氏の館跡が寺院化。<br>・館之内の仁科氏居館からみて丑の方角 |
| ⑨ しょうぶ平<br>（八坂押の田） | ・平安期の「瑞華双鳥八稜鏡（ずいかそうちょうはりちりょうきょう）」が出土。経塚か？<br>・松本市内田の牛伏寺との関係を示す伝承あり。 |
| ⑩ 大平地蔵堂<br>（八坂大平） | ・南北朝期の地蔵菩薩像を所蔵。<br>・覚音寺への参道の正面に位置する。 |
| ⑪ 毘沙門堂<br>（池田町北山） | ・平安後期の毘沙門天立像（県宝）あり。<br>・附近に「寺間」等古寺院に関係した地名が多い。 |
| ⑫ 成就院（じょうじゅいん）<br>（池田町北山） | ・本尊は聖観音坐像、近世は曹洞宗、朱印30石<br>・中世、同地に真言宗寺院が存在した可能性あり。 |

表１　山寺周辺の古寺院及び関連史跡の由緒・由来等

山寺の位置と周辺の古寺院、史跡等の関係を示したのが、図１である。多くは仁科氏に関係した古寺院や城館跡であり、仁科神明宮を中心とした宮本[10]、曽根原、閏田の三集落は仁科御厨が創建された当初の領域ではないかと考えられている。

この中で、注目されるのは山寺をはじめとする古寺院の分布であり、それぞれの由緒・由来・伝承をまとめたものが表１である。多くは真言系の密教に関連した寺院とみられ、いずれも大峰山塊から流出する沢筋に沿って分布し、さながら大峰山を取り巻いている観がある。

大峰山は第四紀の礫層と火山噴出物から構成される糸魚川静岡線に沿ってできた特異な構造体で、山容の遠望が奈良県吉野の大峰山に酷似していることが山名の由来とされる。適度な保水力をもっていることから山麓には浸食による沢筋が何本も流下し、谷の開口部では古代から沢水による農耕が営まれてきた。これらの寺院は、こうした段丘上の開発と密接な関連をもっており、そこに仁科氏がこれら寺院の創建を発願した契機があったものと考えられる。

なお山寺には、さらに古い寺院の移転伝承も伝えられており、それによると最初の寺は、東方の沢筋を遡った大峰山山頂付近の「堂平（どうだいら）」（図１の⑤）とよばれる地点にあり、やがて山寺の位置に移転したとするもので、堂平は一定程度の建築物が立地可能な二面の

平坦地から構成されている。この地点から南斜面には別の沢筋である押沢の北沢が流下しており、沢に沿っては寺院に関係した古い集落跡とみられる上在家、中在家の地名が分布している。

## 四　仁科と遍照光院の関係

次に盛蓮寺の本寺であった高野山遍照光院について述べてみたい。同院は、高野山往生院谷にあって別格本山として金剛峯寺に属する真言宗の寺院で、古くは北谷にあったとされ、承元五年（一二一一）には仁科盛家の室仏母尼が、本堂と快慶作の阿弥陀三尊像を寄進している。大町北安曇地方（以下「仁科」と表記する。）との関係はこうした縁もあって古くから深く、江戸時代には盛蓮寺のほか泉福寺（安曇野市明科）、林泉寺（池田町）、光久寺（安曇野市明科）、神宮寺（小谷村）、東徳寺（白馬村）などが末寺となっていた。天正五年（一五七七）には仁科盛信も宿坊として池田の林泉寺屋敷などを同院に寄進している。また、江戸時代には定期的に仁科へ使僧が遣わされ、檀家回りが行われていた。

遍照光院の創設については、参議平実親の息であり、高野聖であった仏種坊心覚（一一一七～八二）の住坊が寺院化したもので、高野山に来住した高野聖たちにより開かれた三十六の道場（院）の一つとされている。同院の歴代住持の中には根本大塔を造営した良印や町石笠塔婆を建立した頼慶などがおり、とりわけ第八世良印は、貞応元年（一二二二）に根本大塔造営の勧進聖人に任ぜられ、鎌倉幕府の支援を得ながら勧進のために諸国を遍歴し、各地で尊崇を受けている。仏母尼が本堂などを寄進した時期は、同院を拠点とした高野聖が盛んに活動した時期でもあり、中には仁科の地へ来訪する者があったとしても不思議はない。今後、遍照光院や高野聖と仁科の関係について、より詳細な検討が必要と考えられる。

## 五　覚音寺と山寺について

次に、大町市八坂藤尾の覚音寺（図1の⑦）について述べてみたい。この寺は、大峰山の北端を挟んで山寺とほぼ対称の位置（図1参照）にあり、「大峰古道」ともいうべき山越えの道で山寺と結ばれていた。

写真4　覚音寺千手観音立像胎内納入木札（『八坂村誌』より転載）

この寺が所蔵する本尊の千手観音立像と脇時の持国天像、多聞天像はいずれも国の重要文化財に指定されており、千手観音像の胎内に納入されていた木札（写真4 以下「木札」という。）からは、治承三年（一一七九）一一月、仁科盛家とその室「芳縁女大施主伴氏」、その子一男三女によって千手観音像の開眼供養が営まれたことが知られている。盛家は、寿永二年（一一八三）には木曽義仲と共に平氏を追って上洛し、「鳥羽四至内」の守護に任ぜられて京中の警備にあたり、水島合戦では平氏に敗れ退却後、義仲と院の対立に巻き込まれて官位を解かれているが、記録上はその後の行方が明らかでない。

写真5　藤尾覚音寺の仏像（『八坂村誌』より転載）（左から持国天立像・千手観音立像・多聞天立像）

しかし、既に述べたように承元五年、高野山遍照光院に本堂と阿弥陀三尊像を寄進したのは仁科盛家の室仏母尼であり、恐らくは木札に記載されている「芳縁女大施主伴氏」と同一人ではないかとみられる。

木札に記載されている内容について触れておくと、まず覚音寺の創設については「最初建立観（勧）進聖人快尊之寺、但何歳月日慥不知」と記載されており、この寺を最初に建立したのは勧進聖人に任ぜられていた快尊という僧侶であるが、治承三年当時、それがいつか不明確になっていたことが知られる。なお、文禄四年（一五九五）の観音堂を修復した際の「棟札銘写」によれば、本寺の創建について「当山は承り聞くに戸隠山として最初建立せり」とし、戸隠との関係を暗示している。

また、造像の経過については「金剛仏子（師）宗慶、已灌頂聖人勧進之」との記載から本千手観音像の建立は、このとき既に密教（おそらくは真言系の東密）の秘法伝授である「灌頂」を受けていた金剛仏師宗慶が勧進聖人となって実現したものとされ、ここにみえる宗慶とは、寿永二年、運慶の発願による『法華経』第八巻の奥書中に実慶、快慶等と共にその名が記載されている慶派仏師の一人ではないかとみられる。

このほか木札には、大仏師として「講師」の称号をもつ武蔵講師慶圓六郎坊、小仏師として重源、香飯両名が、また念誦僧として宗慶はじめ九名の僧侶の名がみえ、執筆僧は湛海と記されている。

（次回その二では、山寺と周辺寺院の関連について考察する予定）

（大町教育委員会教育長）

## 別掲『盛蓮寺観音堂縁起』（抄）

大町市社松井文書

（上略）爰に鵝湖州仁科曽根原の郷源花山盛蓮精舎は、高野之奥の法水遍照光院の流にして、秘密瑜珈の道場たり、然るに境内に一宇の観音堂在り、本尊は即如意輪の尊像にて、御長け二尺九寸、行基菩薩一刀三礼の霊作也けり、（中略）

一、村老伝へて云、古への堂宇は即是より子の方十丁ばかり東の山入に在りけり、遙なる哉、平城天皇の御宇大同四辛丑春（寛延四辛未年迄九百四十三年成）田村将軍利仁公有明山の賊徒巍石鬼退治の節草創し給ふ所也、即寺領七十貫文の所寄附の地にして、一所懸命の台也と、聞ならく七堂伽藍の金閣は花月に光を映し、三密加持の玉壇は螢雪に影を競ふて仏法繁茂の地也と云へとも、乱世に係って殿閣もいつとなく破壊し、法式も自ら廃れけるに、中興の時至れるにや、天福元癸巳春（今年迄百五十九年に成る）仁科の領主山田次郎平森任（盛蓮）故有って木曽義仲公菩提のために蘭若を此地へ遷して昔の百分が一になん建し給ふ、即今立の堂（四間四面瓦葺行在茶倉き南向）是なり、（昔は蓮華山と云が此時改て蓮花山とす）

一、古堂の在りし所を世人貴んで山寺と呼来れり、即其処より見下せば、二丁許り南の方に鐘楼門の立たる跡在りけり、（東西十三間南北八九間高サ六丈）俗呼で築山と云へり、又上の方に児の舞有し台と云跡在りけり、其外石仏の像或は礎の類ひ又は住持職の墓所と云へる古塚十許（近年迄は出辺て仏具等拾ひ又は掘り出し）なる事も有今に存して在るが中に、奇なる哉や、五輪の石と云伝へて一つなん在りけるが、適々樵夫の輩力試しに抱持て里迄下さん事を欲すれとも、山霊の惜み給ふにや、神木是有る所よりは重さ倍々して持出る事かたしと云へり、即其石の在る所五輪窪と唱へけらし、

一、松井氏の云、利仁公寄附有し七十貫文の所も税地の畑と成り侍りて閏田村の水帳に字を山寺と云、或は大門なとと名乗りて竿請の筆数々有り、よって其所を盛蓮寺沖と呼び侍る也、扨又丹生子の郷の辺りに尾中山竜泉寺と云し隠居寺の跡在りて、此所への通路八澗道迄出る所凡六七丁も有ぬべし、北大門と皆人呼びける所は即是也、此寺にも十貫文の香免有しと云へとも、今なん尾中と云名のみして山は貢もなかりけり、豈誰か懐旧の情を催ざらんや、

一、当山主明岸法印の云、抑当寺の繁昌、去慶長の頃までは寺領も全く、檀家も多かりし故に、山内裕福にして高徳嵯峨たり、故に護摩の香煙馥々と爇く時は、補陀山頭の瑞雲爰に立かと疑ひ、梵器の清韻陰々と響く時は、無垢世界の音楽も遠からずと感じあへり、然りと云へとも興廃は仏陀も免かれさせ給はぬにや、織田信長公天下に邪威を震って神社仏閣を破脚せし日、当山の領地をも過半奪ひ取り公田となせしより、寺格年々に衰へけらし、看よ看よ、境内の地勢漸く東西二丁の余、南北へ四十間ばかり、又仏供の料は僅か七石三斗五升目の余、慶安の惣竿に除き地と成たるのみ也、

（中略）

穂高隠士荒河氏

寛延四辛未夏　七十一翁出芳国

卯の花の盛りになんしるしおはんぬ

（下略）

(1)平凡社『長野県の地名』三五六ページ。現在は白山神社となっているが、元来は「一寺六坊」の寺跡と伝わる。

(2)『大町市指定文化財調査報告書』、『大町市史』第三巻（一九八五年）

(3)同右

(4)大町市社松井家文書、ただし別掲は社誌編集委員会編『やしろ』（一九七五年）より抄録

(5)『盛蓮寺観音堂解体修理報告書』（一九六五年）

(6)『大町市史』第三巻では、古瀬戸について、草創期からあまり時を経ていない頃の製作で、産地を現瀬戸市菱野団地附近と推定している。水注は中国江西省景徳鎮龍泉窯の産。

(7)石製板状卒塔婆は、平成二三年の発掘調査で初めて検出された。

(8)『盛蓮寺観音堂修理工事報告書』（一九六五年）角柱の面取りなどに古風な様式を残しているため山寺からの移築も考えられていたが、解体修理の際に室町時代中期を遡らない建築であることが確認された。

(9)一志茂樹著『仁科氏文化の研究』（一九三七年）

(10)奈良県の大峰山は広義には大峰山脈を、狭義には山上ヶ岳をいうが、本来は小篠から熊野まで大峰といい、小篠から山上ヶ岳を経て吉野川までは金峰山（きんぶせん）とされる。

(11)『信濃』第一巻第八号所収、一志茂樹著「山寺の復元」

(12)『高野春秋編年輯録』巻七、『紀伊続風土記』

(13)「天正五年仁科盛信寄進状」（松本市　伊藤文書）

(14)拙稿「遍照光院と仁科氏について」『仁科路』第一一八号

(15)村上弘子著『高野信仰の成立と展開』（二〇〇九年雄山閣）

(16)幅具義ほか著『藤尾覚音寺』（一九九〇年藤尾覚音寺護持会発行）

(17)『吉記』寿永二年七月三〇日条、『参考源平盛衰記』巻三十三

(18)『吉記』寿永二年一二月三日条

(19)「文禄四年覚音寺観音堂修造棟札銘写」（覚音寺蔵）による。

(20)『国史大辞典』第八巻による。確認不足のため「みられる」とした。

山と博物館　第56巻　第10号
二〇一一年十月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二二―二一三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三三九三

R100 PRINTED WITH SOY INK この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。